

ロンドンパラリンピック競技大会で日本選手の活躍が続いている。第7日の9月4日までに、日本は7つのメダル（金2、銀3、銅2）を獲得。これまで厳しい練習に励んできた選手からは笑顔がはじけた。

日本人選手の金メダル第1号は、柔道（視覚障害）100キロ超級の正木健人選手。1日、準々決勝で3連覇を狙ったイルハム・ザキエフ選手（アゼルバイジャン）、決勝で前大会銀メダルの王嵩選手（中国）という強敵を破り、初出場で堂々の優勝を決めた。

柔道は中学1年から始めた。生まれつきの弱視だが、ほかの生徒と一緒に稽古に励み、兵庫の育英高校時代は全国高校総体で3位になった。身長は191センチ、体重は140キロ以上あった。

天理大に進学後、視力を理由に就職先がみつからず、留年。そんな時、徳島県立盲学校教員の誘いで、盲学校に入学。23歳で障害者柔道に転身した。

昨年、トルコで行われた世界大会で優勝。初の国際大会で初戦からすべて一本勝ちし、自信を得たという。「柔道は生きがい。これからも一本勝ちにこだわっていく」。汗まみれの顔からは、笑みがこぼれた。

9月2日の競泳100メートル背泳ぎ（視覚障害）では、秋山里奈選手が大会新記録をマークして優勝した。得意のスタートが決まり、浮かび上がった時点で首位。そのまま1位で50メートルを折り返し、

他の選手の追い上げも振り切った。

今年7月、大阪市で行われた大会では約2年ぶりに自己ベストを更新し、世界新記録をマークしていた。秋山選手は「パラリンピックで1位にならないと世界一じゃないと思っていた。やっと真の世界一になれた」とうれしそうに話した。

このほか、競泳100メートル平泳ぎ（視覚障害）の木村敬一選手や、同（運動機能障害）の中村智太郎選手、陸上400メートル（車いす）の伊藤智也選手が銀メダルを獲得。「旗手としてもメダルを取れ、役割を果たせた」（木村選手）、「全力を出して、爽やかに散った。誇り高き銀」（伊藤選手）、「メダルは率直にうれしい」（中村選手）とコメントした。

また、水泳（運動機能障害）の鈴木孝幸選手は、150メートル個人メドレーと、50メートル平泳ぎで銅メダル。前大会では金メダルだっただけに期待も大きかったが「メダルを取れて良かった。ようやく重圧から解放された」と安堵の表情を浮かべた。

また、シッティングバレーボール女子は、第2戦でイギリスに勝利したが、準々決勝のウクライナ戦で敗退。全敗に終わった北京大会から4年。「まず1勝を」という目標は達成した。ボッチャ混合団体（脳性まひ）では、準々決勝でポルトガルに敗れ、4強入りはならなかった。

（福祉新聞・2590号 2012年9月10日）

厚生労働省が7月26日に発表した2011年度介護給付費実態調査によると、介護サービスと介護予防サービスの利用者は前年度比24万5,600人増の517万3,800人となり、4年連続で過去最多を更新した。

利用者の内訳は、介護サービスが18万5,200人増の420万1,000人、介護予防サービスが5万4,000人増の127万3,100人（重複を含む）。

利用者数は居宅介護サービスが5.5%（16万

4,100人）増え、施設サービスが2.4%（2万6,700人）増えた。

利用者1人当たりの費用は月額15万7,000円（12年4月審査分）で、前年同月より1,200円増えた。都道府県別では、介護サービスは沖縄の21万2,400円が最も高く、高知の20万9,500円、石川の20万3,500円が続いた。

（福祉新聞・第2586号 2012年8月6日）